

司式:海野 恵

奏楽:中井喜久子

前奏:「我らと共に留りたまえ、主イエス・キリストよ」(J.S.バッハ)

招詞:眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讚美歌:2「聖なる神は」

## 交読詩編 30. 1-6

01 【賛歌。神殿奉獻の歌。ダビデの詩。】

02 主よ、あなたをあがめます。あなたは敵を喜ばせることなく／わたしを引き上げてくださいました。

03 わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを／あなたは癒してくださいました。

04 主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ／墓穴に下ることを免れさせ／わたしに命を得させてくださいました。

05 主の慈しみに生きる人々よ／主に賛美の歌をうたい／聖なる御名を唱え、感謝をささげよ。

06 ひととき、お怒りになっても／命を得させることを御旨としてくださる。泣きながら夜を過ごす人にも／喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

## 朗読聖書①イザヤ書 12. 1-6

## ◆救いの感謝

01 その日には、あなたは言うであろう。「主よ、わたしはあなたに感謝します。あなたはわたしに向かって怒りを燃やされたが／その怒りを翻し、わたしを慰められたからです。

02 見よ、わたしを救われる神。わたしは信頼して、恐れぬ。主こそわたしの力、わたしの歌／わたしの救いとなってくださった。」

03 あなたたちは喜びのうちに／救いの泉から水を汲む。

04 その日には、あなたたちは言うであろう。「主に感謝し、御名を呼べ。諸国の民に御業を示し／気高い御名を告げ知らせよ。

05 主にほめ歌をうたえ。主は威厳を示された。全世界にその御業を示せ。

06 シオンに住む者よ／叫び声をあげ、喜び歌え。イスラエルの聖なる方は／あなたたちのただ中にいます大いなる方。」

## 朗読聖書②ヨハネによる福音書 20. 24-29

## ◆イエスとトマス

24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。」

ここに集う一人ひとりの尊い救い主イエス・キリストの父なる御神さま、愛と慈しみに満ち給う尊い聖名を賛美致します。

神さまのお導きによって御旨の内に全く罪の無い神の独り子イエス・キリストが、私たちの罪の贖いのために十字架に架けられ、極限の苦しみをお受けになりました。そして天に昇られ復活をなさったその喜びの礼拝に、先の主日、私たちは与りました。今朝、復活節第二の主日礼拝を献げることが赦されました。感謝致します。ライブ配信によって共に礼拝に与っている兄弟姉妹に、等しく恵みを与えてくださいますように祈ります。

今朝は特に先に召された先達の方々、そのご家族の方々とこの礼拝の場に招かれていることを感謝致します。

私たちは先の主日礼拝において、聖霊のお導きによる御牧師を通してメッセージを頂きました。復活の主が私たちに近づき、共に歩み、ご自分を示してくださったこと、私たちは最早一人で歩むのではなく、復活の主と共に歩むことを告げ知らされました。御前にあって過ぎた一週間を思い返すとき、主と共に歩むことを願いつつも自分の判断が一人歩きして、愛に乏しかったことを思います。神さまの赦しを乞い求めます。このような私たちをも今朝、再び礼拝にお招きくださった尽きない恵みに感謝申し上げます。

信濃町教会は今年度 102 年目を迎え新たな希望を与えられております。けれども私たちは、地上での年月を重ねる中で体の衰えを知り、地上での命には限りがあることを思います。それに伴って魂も嘆きを覚えることもあります。そのような時も神さまが愛する御子イエス・キリストを私たちの救いのためにお送りくださいましたことを、御子の十字架によって私たちは既に贖われていることを固く信じさせてください。お互いに祈りつつ、励まし合いながら、希望を持って御前を進んでいくことができますように。

世界の平和のために祈ります。米国とイランの戦いが一時的にせよ停戦へと至りました。どうぞこの状況が実のある停戦へと導かれますように切に祈ります。罪人をさえ用いられ、御心を為し給う全能の神さまのご支配に私たちは希望を持ち続けます。戦禍が一日も早く止みますように、人々の苦しみに癒しの道が与えられますように、平和の御心が為されますように切に祈ります。日本においても痛ましい天災や人災が起きております。苦しみの中にある人々に助けをお与えくださいますように。また福島に残された先の見えない負の遺産に解決の道をお与えくださいますように切に祈ります。礼拝から遠ざかっている友の上に憐れみ深い主の御導きを祈ります。病で苦しむ友に、介護の労苦を担う友、老いの寂しさの中にある友、喪失の苦しみに耐えている友の傍らに、慰めの主がお立ちくださいますようにお祈り致します。

今朝、『悲しみを担う主イエス』と題して御言葉を取り次いでくださる笠原牧師のお働きを祝し、聖霊が豊かにお導きくださいますように祈ります。渾身の思いをもって準備された御言葉を聞く私たちの心を開き、復活節の恵みを授けて頂きますよう祈ります。

今朝献げられる日本各地の主の日の礼拝、世界各地の礼拝によって主の救いが遍く宣べ伝えられ、聖名が誉め称えられますように。この礼拝の主催者として、初めから終わりまでを御手の内に置いてくださいますように切に祈ります。

言い尽くし得ませぬ感謝と祈り、私たちの尊き救い主イエス・キリストの聖名を通してお献げ致します。アーメン。

## 讚美歌:316「復活の主は」

### 説教 「悲しみを担う主イエス」

笠原義久

神は去る主の日、私たちにイースターを与えてくださいました。主イエスの復活に与ることを赦してくださる神の深い憐れみと恵みに対したた感謝するほかありません。

復活のキリストに出逢ったトマスが、「わたしの主、わたしの神よ」と、そのように言う以外、他に何の言葉もなかったように、私たちが心の底から「わたしの主、わたしの神よ」と、そのように言うほかありません。

イースターは、端的に、無条件に、喜びであります。ヨハネ福音書によると、主イエスが十字架の上に死んだ後、望みを砕かれ、恐れと不安の中で戸を閉じていた弟子たちのもとに復活したキリストが来られ、「あなたがたに平和があるように」と言われ、ご自分の「手とわき腹をお見せになった」。そして弟子たちは「主を見て喜んだ」と、そのように記されています(9:19-20)。

「主を見て喜んだ」、この「喜んだ」という言葉は、受身の形「喜ばされた」と記されています。主が弟子たちにお逢いになるという事実に「彼らは喜ぶほかなかった」と、そういう意味でありましょう。「ただ喜ばざるを得ない」、それが「復活の主に出逢った弟子の姿であり、またキリストの復活の告げ知らせを聞いた者、イースターを与えられた私たちの姿である」と、その言ってよいでしょう。

イースターが喜びであるのは、イースターが端的にイエス・キリストが生きて私たちの主として働いておられる、この出来事を徹底して告げ知らせしているからであります。私たちの魂も、私たちの体も、そしてまたこの世界も、他ならぬあの十字架と復活の主の、今、生きて働いておられる御手の中にあるということ、そのことが明らかに示されているからです。

さて、お読み頂いたヨハネ福音書は、「ディディモと呼ばれるトマス」について記しています。彼は、他の弟子たちからキリストの復活の証言を聞いても、「あの方の手に釘の跡を見、この指をその釘跡に差し入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」そのように言ったとあります。この「信じることのできない不信のトマスに復活の主が出逢ってください、その不信を打ち砕かれた」というのが、この個所の趣旨でありましょう。確かに主は、私たちの不信によって、私たちが信じないということによって墓の中に閉じ込められるような御方ではなく、むしろ復活の主の方が私たちの不信を砕いてくださる、そのことをこの箇所からの私たちは聞くことができます。

トマスについてのこの記事から私たちはもう一つのことを聞くことができます。それは「復活の主は、他ならぬあの十字架で死んだイエスその人である」という告げ知らせです。ゴルゴダの丘の十字架の上に死んだイエスと、復活のキリストとが同じ人物であるかどうか、同じ実質を持っているかどうか、そのことが、当時の教会に強く根深くあった疑問でありました。トマスについてのこのヨハネ福音書の記事は、そのような疑問や問いに対する一つの答えだと、そのように言ってもよいと思います。

トマスは、「わたしは見なければ決して信じない」とそのように言いました。それに対して主は、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われた。勿論これは、キリストの復活を信じるのか信じないのかという、そういう問

題であります。しかしここではそれ以上に、あの十字架に手を釘づけられ、わき腹を槍で突き刺されて死んだイエスその人が、復活されたキリストとして此処におられる、この事を信じるのか信じないのか、そういう問いだと思います。

復活のキリストが十字架に死んだイエスその方であると言うことは、私たちは疑う余地など寸分もない当然の出来事となっています。ですからこの出来事に私たちは何の驚きも感じなくなり、この出来事の持つ深い意味も、また力も、自分の魂を根底から揺り動かす、そういう衝撃として私たちは受け取れなくなっている、それが私たちの実の姿ではないでしょうか。トマスのこの記事は、そのような私たちを鋭く打ちます。ヨハネ福音書は、十字架の傷跡鮮やかな復活の主イエス・キリストと、この主に<sup>まみ</sup>見えた弟子たちの驚きと喜びという最初の衝撃に向かって私たちを連れ戻そうと、そういう意図が明らかにあると思われま

「あの方の手に釘の跡を見、この指をその釘跡に差し入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」そのように言うトマスに対して主は、「あなたの指をここに<sup>あて</sup>てわたしの手を見なさい」、また、「あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい」とそのように言われました。今、主は私たちにもトマスに語ったと同じことを主は私たちに仰っているのではないのでしょうか。

今、生きて働き、私たち一人ひとりを、またこの世を支配しておられる復活の主は、あの十字架に死んだイエス、そのお方です。私たちの罪と死、その一切の力を主は担われました。そして、この罪と死の力に勝利し復活されたこのお方は、私たちの主として、私たちに親しく出逢ってください。かの日、弟子たちにご自身を顕されたと同じように、今、私たちに聖霊においてご自身を顕されます。私たちがトマスのように、その手の傷跡を見、脇の傷に触れて、「おお主よ、私たちの神よ！」と、そのように言うことが赦されています。そしてそこへと私たちは招かれています。私たちがまた、弟子たちが主を見て喜んだように喜ぶことができるのではないのでしょうか。イースターが私たちにとって喜びでないはずがありません。

さて、復活節の中にある今、過ぎた受難節を思い、またキリストの復活の光の中でその十字架に目を向けるということは、私たちの信仰の本質に属することです。十字架と復活が切り離され、受難節と復活節とが切り離されるなら、それはもう聖書が告げている信仰ではありません。私たちはこの復活節にあたり、今一度、十字架とキリストに目を向け直したいのです。今朝の聖書の主の言葉、「あなたの指をここに<sup>あて</sup>て、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。」この主の御言葉に促されて、その主に今一度目を向け直してみたいのです。

ゴルゴダの丘に立った主イエスの十字架が私たちの罪の贖いのためであったということを私たちは聖書から聴いてきました。私たちはこの主の十字架によって神から義とされ、神から「よろしい」、根底的な「然り・よろしい」と、語られた者たちです。私たちは今、主の復活の光の中にある者として、十字架に架かり給うたキリストに今一度目を向けたい、十字架の死を死ななければならなかった主イエス、神の御子でありつつ、しかし一人の人間として死なれた主イエスに目を向けたいのです。

さて、イエスが最後の日、深夜、3人の弟子をお連れになってゲッセマネの園で祈っておられた時の言葉があります。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。(マタ26:38)」。此処には恐ろしいまでの深い悲しみに主があつたと

ということが分かります。言葉に表されない苦悩に塗れた悲しみが此処にはあります。主は弟子たちに呻くように、ご自分の魂の深みから嘆きを披瀝し、“悲しみのあまり死ぬほどである”とそうように告げておられます。

主イエスの十字架は、私たちにあって、贖いの出来事でありました。しかし、主にとっては正に、“悲しみの出来事であった”と、そのように言うことができます。それは苦しみを超えての悲しみでした。十字架が主イエスにとって苦しみであったのは勿論のことですけれども、しかし主の魂の深みにおいては、それは肉体的、精神的、そういう言葉を使うのが相応しいかどうか分かりませんが、“肉体的に、精神的なそういう苦しみを超えた悲しみであった”と言わなければなりません。マルコ福音書が、“わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。”と、そういう御言葉を記しているのは、弟子たちと、そしてその後が続く教会に、“この主の極みにおける悲しみを覚えよ!”と、ということではなかったでしょうか。“このわたしを見よ!わたしの悲しみを覚え、心に留めよ!”と、そういうことではなかったでしょうか。ヨハネ福音書でトマスに手と脇腹を示された主を、マルコ福音書が記すところと重ね合わせ時、その傷を示されることによって、主は十字架の悲しみを示し、その悲しみを分け与えようとしておられるのではないかと、そういうふうに思えてなりません。

キリストのこのような苦しみと、そして、その苦しみの果てにある悲しみは一体どこからくるのでしょうか。勿論、主イエスは人間イエスとして、様々な苦しみや悲しみを負われたに違いありません。しかし、聖書が“自分は死ぬほどの悲しみを負っている”とそういうふうに記す時、“人間的な悲しみというものを超えてイエスの悲しみが特別な様相と、そして由来を持っていた”と、そのように言うべきではないでしょうか。

まず、主イエスの悲しみ、その一つは、神の御意思を担っている者としての悲しみです。主イエスはご承知のように、ヨハネ福音書の冒頭にあるように「神の言」と主イエスは言われています。イエス・キリストは、神を啓示するお方、つまり“神がどのようなお方であるか、その神の御本質をご自分の身をもって示されるお方である”、「神の言」とはそういう意味であると思います。この神を啓示するお方としての主イエスの悲しみ、その悲しみは、この神の御意思を担い、その御意思をこの世界で成すために、この人間世界に置かれている、そういう者の悲しみであります。

主イエスは、神の救いをもたらすために私たちがもたらされました。しかし、そこで受けたのは、イエスが召した最も愛する弟子たちの無理解であり、世の人の侮りであり、そして、ついには十字架の死を死ななければならぬという、そういう苦しみの極みを負うことであります。そして最後は、ついにはあの十字架の死を死ななければならなかった、つまり神から見捨てられるということ、そのことを経験しなければなりません。神の御意思を担い、そのために働く者の悲しみが主の悲しみの一つのことでありました。主イエスの悲しみの一つはそのように、第一は神の御意思を担っている者としての悲しみでありました。

更に、主イエスの第二の悲しみ、それは私たちのこの世の悲しみ、それを私たちに代わって担うことを引き受けられた、それが第二の悲しみです。私たち一人ひとりと、この世界の不義や罪、そこに根差す一切の悲しみをまともに丸ごと担われた、その故の悲しみであります。

私たちはキリストの贖いというものを、どうしても、キリストの贖い、恵みというものを、命の無い、何か無機的で機械的なこととしてしまいが

ちであります。教会の教え、聖書が説いている教え、確かにそうでありませぬけれど、そういうふうにとただ命のない言葉だけの無機的、機械的なこと、そういうことになってしまっはいけない。そうであるならばそれは福音ではありません。何ら生きた力とはなりません。しかし十字架の主、そのお方の私たちのための苦しみ、悲しみに、本当に目を開かされる時、私たちは主イエスと、命の通い合いというものを覚えざるを得ないのではないのでしょうか。私たちが目を向けなければならないのは、“主の十字架ではなく、十字架の主”です。十字架の主は、私たち人間のこのような悲しみを、私たちに代わって担い、私たちと世界の救いのために意思を為さる、そういうお方です。私たちの罪に由来する、罪と離れ難く結びついている悲しみ、私たちが存在することの労苦とそれに伴う一切の悲しみ、それらを私たちに代わって担い、主は十字架に付き給いました。“彼は悲しみの人にして悩みを知る(イザ 53:3)”、聖書はそう記しておりますけれども、まさに悲しみの人にして悩みを知る、そういうお方として十字架に架かり、そしてそのようなお方として復活し、今生きて働いておられます。

私たち人間は悲しみの存在、悲しみと共にある外ない者たちであります。神との係わりで言うなら、罪の中にある者であり、赦されなければ立ち得ない者たちです。人間と、そして人間社会の本質は、様々な事を蒸留した後に残る者と言うならば、“人間と人間社会の本質は悲しみだ”ということができるとはならないでしょうか。いや聖書は少なくとも、今お話ししたように、聖書は、“人間と人間社会の本質は悲しみだ”ということができると、そのように言っているのではないのでしょうか。

主イエスは人間のそのような悲しみを担ってくださいました。真に些細な悲しみも、罪ある存在に関わるそういう悲しみも、全て担い、そして十字架に着いてくださいました。私たちは、このように主によって悲しみを担われた者として、しかし、今度はその主に従う者として“悲しみを担う者となるように”という、そういう勧めを私たちは今受けていないのでしょうか。聖書が語る神の御言葉を聖霊の働きによって確かに聞き取り、そのように生きる者とされるということ、それはこの時代や隣人の悲しみを分け与えられて共に生きるようにされることではないのでしょうか。“他者の悲しみを分かち与えられる、そういう愛の心を持つ者とされたい”と、そのように私たちは促されているのではないのでしょうか。

私たちが復活の主を喜ぶということは、私たちの罪が担われ、死が討ち滅ぼされ、悲しみが負われたということでもあります。しかし主の復活を喜ぶということは、同時に、“あなたがた、世の悲しみを担う者となれ!”という、そういう勧めを私たちが聞くということではないのでしょうか。

あのトマスが、主の御傷に目を留め、そこに触ることが赦されたと言うことは、その“主キリストに遣わされる”ということを意味します。信じることでできない存在としてのトマス自身の悲しみが、その御傷を示されたキリストによって担われる、そのことによってトマスは“キリストの悲しみに与ることを赦され、他者の悲しみを担うために遣わされる”、そういうことが、ここで起こっているのではないのでしょうか。

十字架において、私たちの罪を贖い、悲しみを担って下さったお方は復活され、生きて働いておられる主イエスのお方です。私たちはこの主に對して、心からの賛美と忠誠と共に、赦しを願う懺悔の思いを込めて、トマスと一緒に、「私の主、私の神よ!」と、そういう声を上げ、彼のように新しく立たせられたい。そして、“主の担って下さった悲しみを分け与えられた者

として、夫々が持ち場を走る者とされたい”と、そのように願います。主は、悲しみの人にして悩みを知る方として復活為さり、そして今、生きて働いておられます。祈りましょう。

主なる御神、主キリストによって根源的な悲しみを担われた者として私たちを、他者の悲しみを担うところへと遣わせてください。キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:531「主イエスこそわが望み」

献金・感謝(野呂道子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

愛する私たちの救い主、主イエス・キリストの父なる神さま、今日も新しい日曜日の朝、こうして教会に招いてくださり、愛する兄弟姉妹とともに、共に礼拝を守ることができること感謝致します。

今、世界中では、戦争が相次いでおり、毎日のようにイランやガザ地区、ウクライナの話が私たちのところにも飛び込んできます。決して遠い国で起こっている出来事ではないと私たちがいつも心に留めて祈り続け、行動することができるようにあなたが導いてください。また、特にそのような場所で苦しんでいる悲しみの中にいる子供たちをあなたが特別に守り、祝福して導いてください。

今日は敬愛する笠原先生より、イエスさまが復活を通して私たちの罪を赦してくださり、そして悲しみを担ってくださったからこそ、私たちも今度は他者の悲しみを担い生きることを望んでおられる、私たちがそのように遣わせてくださるという話を伺いました。どうぞ私たちが今この世の中において他者の悲しみを担って他者のために働くことのできる者でありますように。次の一週間もあなたがお守りください。導いてください。

今、あなたから頂いている物の中からほんの僅かではありますが御前にお献げ致しました。どうぞ、あなたがあなたのご用のためにお使ください。

あなたが教えてくださった主の祈りを共に祈り、新しい一週間を始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、永遠とこしえにあるように。アーメン。

報告:2025年度修養会報告完成の案内ほか

後奏:「天使の証人」(H. プレトリウス)